

A Sweet Girl Graduate (1891) における教養教育の意義

志 渡 岡 理 恵

はじめに——L.T. ミード (Meade) のキャリア形成

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて 300 冊以上の作品を世に送り出したイギリスの女性作家 L.T. ミードは、さまざまなジャンルに挑戦したエネルギーで進取の気性に富んだ作家だった。アナ・ボーゲン (Anna Bogen) によれば、1854 年、アイルランドのコーク州に牧師の娘として生まれたミードは、母親が死去し、父親が再婚した後、周囲の反対を押し切って 17 歳で作家を目指しロンドンへ向かった。大英博物館の閲覧室で最初の小説を書き上げた彼女は、22 歳でそれを出版にこぎつけ成功をおさめると、1 年に 10 作品の宣伝が出るほどの人気作家となった。25 歳で結婚し、3 人の子どもの恵まれてからも、驚くべきペースで作品を発表し続け、それらの作品は 1930 年代に入っても幾度となく再版された (Introduction xvii-xviii)。

ミードは、少女雑誌『少女の世界』(*The Girl's Realm*) の 1900 年 11 月号において、「私はこのように始めました」(“How I Began”) という自伝エッセイの中で、自身のキャリア形成について次のように語っている。

I had to got to succeed – I had got to prove my world that I had something in me....I wanted to prove that I had a gift and that I would use it. But money was also essential, for if I could not add to my income, I could not stay in London, and to come home a failure was impossible!

So I worked. Yes, I worked very hard. I secured a ticket for the reading room of the British Museum, and there I spent my days. Come hail or storm, no matter what the state of the weather, I was always at my desk. (252)

このエッセイは、芸術や科学、慈善活動の分野で功績をおさめた女性たちが自分のキャリア形成について語るシリーズの第1回目の記事だった。このことから、ミードが女性作家として確固たる地位を築き、自立を目指す少女たちの憧れの存在であったことが分かる。ミードは、読者である少女たちに、平易な言葉で、飾ることなく、自分の経験や想いを伝えている。ここで注意したいのは、成功やお金の必要性についても率直に述べている点である。自分には才能があると証明しなかったと打ち明け、お金や名声、たゆみない努力の必要性を説く姿勢には、次世代の少女たちに現実的な助言と励ましを与えたいと願うミードの実直で温かい人柄が感じられる。

資料に埋もれながら、来る日も来る日も疲れ果てるまで作品を書き続けたというミードは、新たな文学ジャンルを次々に切り拓いていった。現在は少女小説の創始者として名を残しているが、彼女の初期の作品はロンドンの貧民を描いた小説であり、男性医師とコラボレーションした医学ミステリーでも大変な人気を博した¹。とは言うものの、大学教育を受けたプロのジャーナリストであるセアラ・トゥリー (Sarah Tooley) が1897年に中産階級向けの月刊誌『ウーマン・アットホーム』(Woman at Home) に寄せた記事「女性小説家たち」(“Some Woman Novelists”)によれば、ミードが最も心を向けている読者は、かつての自分と同じように「自立しようと苦闘している勇敢な少女たち」であった。

There is no class whose struggles appeal to Mrs. Meade's kind heart than the brave girls who are striving to make their own way in life, and her stories are specially stimulating for them. She sees with pleasure the various means of livelihood now being opened to women, and believes that it is better for every woman to have a career, whether she has money or not. (256)

17歳で家を飛び出し、猛然と執筆に取り組み作家として成功したミードは、自立を目指す少女たちの希望と不安を誰よりも理解していたに違いない。そして、自分と同じように、次世代の少女たちにも自分の才能を発揮して認められる喜びを、経済的に自立することで得られる自信を感じてほしいと願っていたのだろう。

このような輝かしい作家としてのキャリアを持つミードが開拓した新ジャンルのひとつが女子大生小説である。1891年に出版された彼女の『スウィート・ガール・グラデュエイト』(A Sweet Girl Graduate) は、女子大生小説研究の先陣を切ったボーゲンが2014年に作成した35作品から成るリストによれば、最初的女子大生小説である。ミードは、他にもケンブリッジ大学的女子学寮ガートン・カレッジをモデルにした『マートン・カレッジの少女たち』(The Girls of Merton College, 1911) と、『チェスタートンの女子大生たち』(The Chesterton Girl Graduates, 1913) という2冊の女子大生小説を書いている。女子大生小説は、1930年代には男子学生を主人公にした大学小説の数を上回るほどの人気の高いジャンルに成長した (Women's University Fiction, 1880-1945 11)。

このような先駆的な作品を書いた作家であるにもかかわらず、ミードに関する本格的な研究はまだまだなされていない。それは、彼女が目覚ましい活躍をしたのが、いわゆる「キャンノン」からは長らく除外されてきた大衆小説の諸ジャンルだったからだろう。また、1970年代以降、女性作家を再評

価する動きが高まり、近年、少女小説の復刻版も数多く出版されるようになってはきたが、300冊を超える作品を書いたミードの全体像を捉えるのはたやすい作業ではない。さらに、『スウィート・ガール・グラデュエイト』に関して言えば、21世紀に入って女子大生小説にも研究者の関心が集まるようになってはきたものの、このジャンルの著者の多くはオックスブリッジ出身者であったため (*Women's University Fiction, 1880-1945* 2)、大学教育を受けたことのないミードの作品は軽視される傾向にあるのは否めない。しかし、間接的にはあれ、ミードは、女子教育に関する知識は豊富に持っていたと考えられる。彼女は、自らが編集を担当した少女雑誌『アタランタ』(*Atalanta*)において、少女たちに教育と職業に関する情報を数多く提供していた。1890年代にはミード自身がガートン・カレッジとニューナム・カレッジを訪れて記事を書いている²。教育者との交流もあり、1853年設立の有名な女子パブリックスクールであるチェルトナム・レイディーズ・カレッジの女校長ドロシア・ビール(Dorothea Beale)は、ミードの友人だった(Bogen, Introduction x)。これらの事実から、多作だったミードの創作意欲の源のひとつが、女性の教育とキャリア形成を支援したいという熱い思いだったことがうかがえる。

本稿は、最初的女子大生小説と目されながらまだ研究の進んでいないミードの『スウィート・ガール・グラデュエイト』をとりあげ、そこに描かれている大学教育の意義について考える。主人公プリシラ(Priscilla)は大学で何を学び、大学教育はプリシラのキャリア形成にどのように関わるのだろうか。プリシラの成長のプロセスとそれを促す教育システムおよび人間関係には、当時のどのような教育観や女性観が反映されているのだろうか。本作品を、当時の少女雑誌における教育・職業に関する言説と照らし合わせながら精読することにより、19世紀末の女子高等教育に向けられたミードおよび当時の人々の期待を読み解いていきたい。

1. 少女雑誌『ガールズ・OWN・ペーパー』における女子大生の表象

作品の分析に入る前に、19世紀末にはまだ目新しかった女子大生という存在および女子高等教育が人々にどのように捉えられていたのかを、当時人気の高かった少女雑誌『ガールズ・OWN・ペーパー』(*The Girl's Own Paper*)から探っていくことにしよう。19世紀に多くの児童書を出版していた宗教冊子協会(Religious Tract Society)によって1880年に創刊されたこの週刊誌は、1ペニーという安価な価格で、使用人から上層中産階級まで幅広い階層に愛読され、25万部以上という女性誌で最大のシェアを誇った。もともとは結婚前の少女たちをターゲットとして想定していたが、実際には10代から50代までの幅広い年齢層の女性たちに読まれ、タイトルを変えながら1960年代まで刊行され続けた(Doughty 7-10)。紙面は、連載小説、短編小説、詩、家政に関する助言、エチケット、さまざまな情報(健康や娯楽、教育、職業等に関するもの)、ファッション記事、読者の悩みに答えるコーナーなどから構成され、美しい挿絵が散りばめられていた。全体的には保守寄りであったものの、女子教育については常に進歩的で、それは読者からの要望に応えたからだと考えられる(Doughty 77)。悩み相談コーナーには、特定の教育機関への入学方法や職業訓練に関する質問が数多く寄せられていた。編集者は、「女らしくない望みを助長している」と批判されずにどこまで自立を望む女性たちの要望に応えられるか、常に考えていたと思われる(Doughty 8)。創刊からしばらくの間は中等・高等教育に焦点が当てられていたのに対し、世紀転換期には焦点が職業訓練に移っ

ていったのは、国外への移住を考える少女の増加が背景にあったらしい (Doughty 77)。19 世紀末は、教育を受けて自立すべく「家」の外へ出て行こうとする少女たちがかつてなく増えた時期だった。

創刊から間もない 1880 年 7 月 31 日号には、J.A. オーウェン (J. A. Owen) による「ガートン・カレッジ」(“Girton College”) という記事が掲載されている。1869 年創設のガートン・カレッジは、ケンブリッジ大学では最古の女子学寮だった。この記事の中で、オーウェンは、ガートン・カレッジが設立されるまでの経緯をたどった後、このカレッジの現況を詳細に述べている。まず、彼女は、ガートン・カレッジでは、奨学金の縛りが無い限り、学生は大学の試験を受ける義務はないし、いかなる修了証明書を得ることも強制されないと説明し、逡巡しているかもしれない未来の志望者を安心させようと試みている。次に、この女子学寮の概略に進み、現在 42 名を超える学生が所属していること、学生の約半数は学校の教師や校長を目指して (ガヴァネスではないと断っている)、それ以外の学生はただ学問が好きだから学んでいること、各学期の所属料は 35 ポンドであることなどを知らせている。そして、経済的に困難な学生には 8 種類ほどの奨学金が用意されていることに触れ、それぞれの金額と受給期間について情報を提供している。それから、どのような学問分野が学べるのか、講義はどのような形式で行われるのかについて述べ、さらに、ガートン出身のアメリカ女性を書いた記事の紹介をしている。そこでは、1 日のタイムスケジュールや、門限、食事、訪問客の受け入れ方、個室の設備、スポーツ、夕食後の娯楽や活動などが詳述されている。最後に、オーウェンは次のように述べている。

The descriptions one hears from Girton students sound very pleasant, and make some of us older women wish such advantages had been open to us fifteen or twenty years ago. It is amusing in these days to read over again the description of college life, given in Tennyson's "Princess," and pleasant to women to realise what progress in almost everything relating to woman's place in the world has been made since the time when that charming poem was written. (79)

この一節には、新世代の少女たちへの羨望とともに、女性解放が進んでいることを喜ぶ気持ちが率直に表現されている。女子教育改革を推進してきた人々の尽力によって実現した女子学寮誕生までの歴史と、現在そこで行われている教育のありようを読者に詳らかにしたオーウェンの文章から読み取れるのは、次世代の少女たちを応援したいという彼女の熱意である。

創刊から 2 年後の 1882 年 7 月 22 日号には、“Sweet Girl Graduates” というキャプションのついた 1 ページ大の挿絵とそれについての説明が掲載されている (図 1)。意外なことに、これは「季節に合った服とその作り方」(“Seasonable Clothing, and How It should Be Made”) というファッション記事の一部で、著者は「あるレイディ・ドレスメーカー」(A Lady Dressmaker) と名乗る匿名の人物である。挿絵に付された「スウィート・ガール・グラデュエイト」というキャプションは、本稿でとりあげるミードの女子大生小説のタイトルと (単数と複数という違いはあるものの) 同じである。このフレーズは当時広く流通していたようで、たとえば、カナダでも同年にセアラ・アン・カーゾン (Sarah Ann Curzon) が『スウィート・ガール・グラデュエイト』(Sweet Girl Graduate) というレーゼ

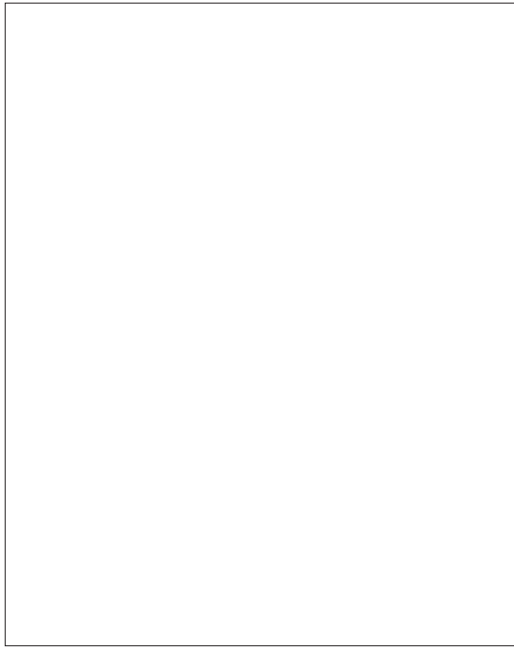


図1 「ガールズ・オウン・ペーパー」
1882年7月22日号

ドラマ（上演されず読まれるための劇）を書いている。これはおそらく、オーウェンの記事でも言及されていたアルフレッド・テニスン (Alfred Tennyson) の詩『プリンセス』 (*The Princess*, 1847) のプロローグの “And sweet girl-graduates in their golden hair” (line 142) に由来するのだろう³。1847年という早い時期に、王女が女子大学を創るという設定で女子教育の問題をテーマに採り上げたテニスンのこの詩は、女子高等教育に関心を抱く人々に大きなインパクトを与えたと考えられる。挿絵に描かれているのは3人の女性で、彼女たちの余裕の感じられる落ち着いた表情、自信と気品に満ちた佇まい、揃いの礼服からは、知的で厳かな雰囲気さがにじみ出ている。記事によれば、彼女たちは1882年5月10日にロンドン大学から学位を授与された11人の女子学生のうちの3人である。

But a much more serious topic awaits me, to which I must hasten on, and that is the subject of the illustration of the “Sweet Girl Graduates,” which portrays three out of the eleven ladies upon whom degrees were conferred at the London University on May 10th, 1882, nine of them being graduates in arts and two in science. The subject of the hood and gown has been discussed in intellectual circles for some time past, but so slow has been the action in our midst that New Zealand took the precedence of us, and more than a year ago not only accepted the position claimed by the ladies, but at Christ Church the Chancellor of the University himself invested the candidates with their hoods in public, with the warmest compliments on their diligence and conduct. (682)

イギリスで初めて女性に学位を授与したのはロンドン大学で、1878年のことだった。その4年後にあたるこの記事が書かれた時点では、オックスフォード大学もケンブリッジ大学も女性の学位取得をまだ認めていなかった（オックスフォード大学は1920年、ケンブリッジ大学は1948年になってようやく女性の学位取得を認めた）。記事の著者は、冒頭でイギリスより1年以上前に女性に学位を授与したニュージーランドを引き合いに出すことで、イギリス側の女子高等教育に対する理解および支援の遅れを批判的に強調している。次に、ファッション記事らしく、学位授与式に臨む女子学生たちの服装を描写し、“Those of our readers who desire a full description will find it in an article called ‘University Hoods and How to Make Them,’ at page 554, vol.i” (682) と述べ、詳細を知りたい

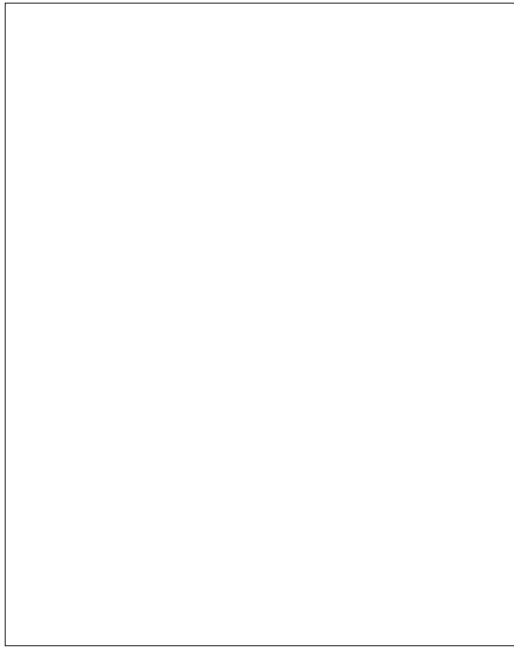


図2 「ガールズ・OWN・ペーパー」
1898年7月23日号

読者に別の記事を参照するように促す。そして、記事の最後で、“I hear that hoods worn on the occasion of which I write were all made by their fair wearers...”(682) という情報を提供し、パイオニア的存在の11人の女子大生たちも自らのフードを手作りしたのだから自分も、と意気込む少女たちを励ましている。これらの記述と挿絵から読み取れるのは、学位を取得した女子大生がまだ少数で憧れの存在だったこと、また、著者（および雑誌編集者）が学位取得を目指す（あるいは夢見る）少女たちが読者の中に少なからずいると認識していたことである。

それから16年後の1898年7月23日号に目を向けると、匿名のレイディ・グラデュエイト (A Lady Graduate) による「ロンドン大学の学位授与式」(“Presentation Day at London University”) という記事が挿絵とともに掲載されている (図2)。女性が初めて学位を取得してから20年が

経過した時点でも、この話題は依然として読者の関心の的であり続けていたことが分かる。挿絵には、シンプルなドレスの上に黒い礼服をまとい、片手を腰に当て、もう片方の手に持った文書を熱心に読んでいる女性が描かれている。学寮の私室と思われる室内には、机があり、その上には沢山の紙が無造作に置かれている。論文の下書きだろうか。手紙だろうか。窓辺には大きな木があり、そこから明るい陽射しが差し込んでいる。堂々たる姿勢で読む行為に没頭する彼女の顔には、自信と気品が満ち溢れている。記事の内容は、学位取得を果たした女子大生が、出席したロンドン大学の学位授与式の様子をレポートしたものである。

学位授与式の始めから終わりまでを生き活きとした筆致で描くこの記事には、当時の女子高等教育をめぐるさまざまな言説が織り込まれている。記事の冒頭では、前日、バッキンガム宮殿で行われたデビュータントの謁見式と、その翌日、ロンドン大学で行われる学位授与式が対比され、あたかも、過去の価値観に依然として従う少女たちと、新たな時代に進もうとしている自分たち女子大生の違いを際立たせようとしているかのようである。続いて、昔ながらの礼服(ガウン、フード、帽子)と、それをまとう少女たちのあどけない喜びに輝く表情のコントラストが強調され、古くから続く高等教育機関に新たな風が吹き込んだ様子が描き出される。それから、式典の進行が臨場感溢れる筆遣いで描写され、特に医学で学位を取得した女子学生に最も大きな喝采が沸き起こったことなどが語られる。そして、筆者は “It is delightful to see so many women reap honours, and in truth they look sturdy and strong, fitting mothers for the next generation, able to educate their children in the fullest sense of the word”(88) と感想を述べる。「強靱でたくましく、次世代の母に相応しく見える」という一節は、それまでの論調とは異なり、女性を産む性としてのみ捉えようとする価値観を甘受してい

るかのような印象を与えるが、記事の後半を読むと、この発言の背景をなす事情が明らかになる。たとえば、“The most ardent opposer of higher education for women could hardly have disapproved of these happy-looking girls, their bright earnest faces glowing with health” (89) からは、女子高等教育に反対する人々が学問は女性の健康を損なうと主張していたことがうかがえる。さらに、次のいくぶん皮肉なコメントには、古い女性像を否定し、女子教育改革を擁護する姿勢が明白に打ち出されている。

Among them one saw no jaded looks or weary eyes, as one sees among girls who have no aim, no ambition, but to shine at a ball or get an eligible *parti*. One hears so much of the injurious effect study has on girls; many men deplore the strides women are making in the pursuit of knowledge; they prognosticate early loss of youth, bright eyes, and good looks; and yet here to-day I see a goodly number of English maidens as healthy, happy, and comely as surely were the women of bygone ages, who watched their brothers' progress, sighing as they ruined their sight over their tapestry. (89)

「舞踏会で目立つこと、よい結婚相手を見つけること以外に何の目標も大志も持っていない少女たち」や、「タペストリー作りで目を悪くしてため息をつきながら、兄弟たちの進歩を眺めていた過去の女性たち」という表現には、そのような古い女性像にはもう縛られたくないという著者の想いが表れている。また、女性が学問に打ち込むことに反対する男性の言い分を数え上げて、それが誤った偏見であることは自分たち女子学生の現在の姿が証明していると言い放つ態度には、自らの成功に裏打ちされた著者の確固たる自信が感じられる。

記事の最後で、著者は、自分の後続く少女たちに向けて、説得力に富む激励の言葉をかけている。

It is sweet to work and reach the appointed goal – only those who have given up pleasure and sacrificed ease can say *how* sweet. Let us hope amid the joy which is here to-day, some feelings of compassion are raised in our hearts for those who strove like us, but did not win. To my girl-readers I would say: Work, keeping the thought of success ever before you. Cultivate the brain-powers which God has given you. Read, and widen your knowledge; think, and broaden your views, and I can safely say dullness will not often trouble you, nor weariness make you its victim. (89)

安易な楽しさだけを求めて時間を費やすのではなく、目標を定め、それに向かって努力を続けることがもたらす感情を、著者は“sweet”という形容詞で表現している。「成功を常に思い描いて励みなさい。神が与えてくれた知力を磨きなさい。本を読んで知識を広げなさい。思考して視野を広めなさい」というメッセージは、読者の少女たちを大いに鼓舞したことだろう。ここで注目すべきは、卒業後のキャリアよりも教養教育の意義—知識や視野を広げ、知力を磨くこと—が強調されている点である。これは、次節で分析するミードの女子大生小説『スウィート・ガール・グラデュエイト』

にも共通している。

このように、少女雑誌においては、女子学生は賞賛と憧れの対象として描かれていたが、世間一般のまなざしは少女雑誌のそれとは必ずしも一致してはいなかった。それは、学位を取得した女子大生を描いた上記の2枚の挿絵と、イギリスの代表的な諷刺雑誌『パンチ』(Punch)の1887年7月2日号(図3)および1888年2月4日号(図4)に掲載された諷刺画を比べてみると明らかである。『ガールズ・OWN・ペーパー』に描かれた女子大生は、正面あるいは横を向き、自信に溢れた知的な表情を読者に見せている。一方、『パンチ』に描かれた女子大生は、いずれも後ろを向いていて、その表情をうかがい知ることはできない。このように、19世紀末の女子高等教育に対する考え方は一枚岩ではなかったものの、多くの女性たちが、少女雑誌というメディアを通して、大学教育に関する情報を提供したり、自らの経験を語ったりすることで、同世代あるいは次世代の少女たちの教育とキャリア形成を応援しようとしていた。こうした状況の中で、少女小説の創始者と言われるミードは、初的女子大生小説の中で大学教育の意義をどのように描いたのだろうか。

図3 『パンチ』
1887年7月2日号

図4 『パンチ』
1888年2月4日号

2. 『スウィート・ガール・グラデュエイト』——古典が結ぶ絆

1891年に出版されたL.T.ミードの『スウィート・ガール・グラデュエイト』は、小さな農場を営む伯母に引き取られた孤児プリシラが、教師を目指して女子学寮に入り、自分で将来進む道を選択するまでを描いた女子大生小説である。この小説には多様な女子学生が登場するが、中心となるプリシラとマギー(Maggie)はあらゆる面に対照的である。主人公のプリシラは、12歳で父親を

亡くし、14歳で母親を亡くした。デボンシャーで小さな農場を営む伯母レイビー (Raby) に幼い妹3人とともに引き取られたプリシラは、老牧師ヘイズ (Hayes) の助けを借りながら本を読み、議論することに楽しみを見出していた。しかし、伯母が不治の病にかかり、自分が生活費を稼がなければと決心した彼女は、ヘイズ牧師に相談し、その結果、18歳のときに教師を目指して女子学寮セントベネッツで3年間学ぶことになる。学費を工面してくれた伯母と牧師の恩に報いるべく、“Prissie felt full of courage and good resolves. She was going out into the world to-morrow, and she was quite determined that the world should not conquer her, although she knew that she was a very poor maiden with a specially heavy load of care on her young shoulder” (12) と、プリシラは固い決意を持って学生生活に臨む。前節で取り上げた『ガールズ・オウン・ペーパー』のガートン・カレッジの記事に、女子学生の約半数は教師を目指しており、経済的に困難な学生には奨学金が用意されているという情報が載せられていたが、プリシラと同じような事情や想いを抱えていた女子学生たちが現実世界にも少なからずいたに違いない。

一方、マギーは、プリシラと同様に孤児ではあるものの、女相続人で裕福である。ひとりっ子で親戚もほとんどいない彼女の世話をしてきたのは、世間知にたけた後見人だった。彼は、マギーが15歳になるとローマへ連れて行き、彼女が17歳になったらシャペロンとともにロンドンに住まわせるつもりだった。しかし、17歳になって間もない頃、マギーはひとりの少女アナベル・リー (Annabel Lee) と出会う。アナベルはセントベネッツの学生で、心も知性も細やかに鍛えられていた。マギーは、アナベルの導きのもと勉強に勤しみ、入学試験を受けてセントベネッツに入学した。それまで学校教育を受けたことがなく、ガヴァネスから自分の意に沿うものしか学んでこなかったものの、優れた才能を持ち、学ぶこと自体が好きだったマギーは、入学後、日に日にその優れた知性を磨いていった。

美しく知的で裕福でありながら、プリシラが出会ったときのマギーは大きな悩みを抱え、苦しんでいた。それは、アナベルの死と深く関わっていた。自責の念に苛まれ、本来の自分を見失っているマギーは、ときにその苛立ちを友人にぶつける。心配する親友のナンシー (Nancy) が、“‘you’re the noblest, and the sweetest, and the most beautiful girl at St. Benet’s! Why can’t you live up to your true self?’” と問いかけると、マギーは、“‘There are two selves in me’” と答え、“‘And if one even approaches the faintest semblance of angelhood, the other is black as pitch’” (149) とつぶやく。そして、突然、“‘Am I never to show my true and real self? Am I always to be disguised in sham beauty and sham goodness? Oh, Nancy, Nancy! If there is a creature I hate – I *hate* – her name is Maggie Oliphant!’” (149-50) と思いを爆発させる。また、相思相愛の相手であるジェフリー (Geoffrey) にも、“No, Geoffrey, but I am struggling – you don’t know how hard I am struggling – to be true to myself.” (98) と、その苦しみを洩らす。

このような深い悩みからマギーが解放されるのは、古典を読んでいるときだけである。ギリシャの悲劇詩人アイスキュロス (Aeschylus) を読むマギーは、次のように描かれる。

This queer girl was showing another phase of her complex nature. Her face was no longer lacking in expression, no longer stricken with sorrow, nor harrowed with unavailing regret. A fine fire filled her eyes; her brow, as she pushed back her hair, showed its rather massive proportions. Now, intellect and the triumphant delight of overcoming a mental difficulty reigned supreme in her face. She read on without interruption for nearly an hour. At the end of that time her cheeks were burning like two glowing crimson roses. (66)

この場面では、悲しみや後悔などすべてを忘れ、ただひたすら知性を働かせる喜びに没頭するマギーの様子が描かれている。同じような光景は、“Maggie turned away, seated herself by her writing bureau, and tried to lose both the past and the present in her beloved Greek.” (150) というように、この作品の中で繰り返し描かれる。

ここで、前節で取り上げた『ガールズ・オウン・ペーパー』の「ロンドン大学の学位授与式」の次の記述を想起してみよう。筆者である女子大生は、学問の効用について“Study, as Sir John Lubbock wisely remarked, leaves no time for dullness; the girl who has hard brain-work to do every day has not time to feel miserable. Petty worries and small annoyances leave her as she becomes immersed in Greek, mathematics, or whatever particular branch she has taken up” (89) と述べていた。たとえ学問が職業に結びつかなくても、学ぶことそれ自体が知性を発達させ、人間をひとまわり大きく成長させる。『スウィート・ガール・グラデュエイト』では、そのような教養教育の意義が、マギーの姿を通して肯定的に描かれていると解釈できるだろう。

さらに、古典は、生まれ育った環境が大きく異なる2人の少女を結びつける役割をも果たす。次の場面は、古典に対する共通の知的好奇心がプリシラとマギーを結びつける瞬間である。まず、2人が所属する学寮の学寮長ミス・ヒース (Heath) がプリシラに語りかける。

“I promise you, my dear, that you shall be a very cultivated woman some day; but I only promise this if you will take advantage of all sides of the pleasant life here. Now tell me what are your particular tastes? What branch of study do you like best?”

“I love Latin and Greek better than anything else in the world.”

“Do you truly?” said Maggie, suddenly starting forward. “Then in one thing we have a great sympathy. What have you read? Do tell me.”

Miss Heath stepped discreetly into the background. The two girls conversed for a long time together. (83)

自活するために教師を目指す貧しく真面目なプリシラと、学問を学ぶこと自体が目的の裕福で気まぐれなマギーは、同じ学寮で生活をとともにすることがなければ、友人関係を結ぶ可能性は少なかっただろう。2人が出会い、教員に導かれて共通の関心事を見つけ、会話に夢中になるこの場面には、大学の民主的な性質が象徴的に表れている。そして、その関心事が古典であるというのは

重要である。ラテン語とギリシャ語は、19世紀後半に女子教育改革が行われるまで男性の専有物だった。それは、プリシラの伯母レイビーが、自分の時代とプリシラの時代の女子教育の違いを“...‘Go and learn all you can at your fine college, Prissie. It’s the fashion of the day for the young folk to learn a lot, and there’s no going against the times. In my young life sewing was the great thing. Now it’s Latin and Greek...” (196) と、裁縫からラテン語・ギリシャ語への移行と捉えていることから分かる。このように、19世紀末のイギリスでは、新しい女子教育の大きな意義のひとつが、古典に代表される教養教育に見出されていたことは間違いない。

3. 教養と社交——大学教育の意義

『スウィート・ガール・グラデュエイト』では、大学生活において重要なのは教養と社交であることが強調される。入学して間もない頃、プリシラは、教養教育により培われたものを、教員と学生の間で交わされる会話の中に関心する。それは、彼女にとって新鮮で、何と表現してよいか分からないけれども、とても素敵なものに感じられる。学寮長とマギーの会話に耳を傾けているプリシラの心情を描いた場面を見てみよう。

They talked of one or two books which were then under discussion; they said a little about music, and a word or two with regard to the pictures which were just then causing talk among the art critics in London. It was all new to Prissie, this “light, airy, nothing” kind of talk. It was not study; could it be classed under the head of recreation?

Prissie was accustomed to classify everything, but she did not know under what head to put this pleasant conversation. She was bewildered, puzzled. She listened without losing a word. She forgot herself absolutely. (79)

書物、音楽、絵画に関して交わされる会話—学問ではないが、ただの娯楽でもない軽妙で何とも分類しがたい心地よい会話—にプリシラは戸惑いつつ、心を奪われる。それまで学校教育を受けたことのなかったプリシラには理解できないものとして提示されているこの会話こそが、大学教育によって培われるもののひとつの表れと言えるだろう。プリシラは、このような会話の根幹をなす教養とそれに基づく社交術を大学生活で身につけていくことになる。

そのような教養と社交術は、「遊びと学問」の両立によって養われる。教師になるために一刻も無駄にすることなく学問に励まなければならないと思い詰めているプリシラに対し、学寮長のミス・ヒースは、“...the successful girl here is the girl who takes advantage of the whole life mapped out for her, who divides her time between play and work, who joins the clubs, and enters heartily into the social life of the place” (82) と、遊び—クラブ活動や社交生活—の重要性を説く。さらに、偶然のいきさつで訪ねることになった学寮の近くに住むマーシャル夫人 (Mrs. Marshall) から、プリシラは次のように優しく諭される。

“No life can be so absolutely delightful as that of a girl graduate at St. Benet’s. The freedom from care, the mixture of study with play, the pleasant social life, all combine to make young women both healthy and wise. Ah, my love, we leave out the middle of the old proverb. The girls at St. Benet’s are in that happy period of existence when they need give no thought to money-making.”

“Some are,” said Prissie. She sighed, and the colour rushed into her cheeks. Mrs. Marshall looked at her affectionately. (88)

すぐには受け入れられなかったものの、プリシラは次第にその助言の正しさを認識していく。マギーの影響もあって討論や演劇のクラブに入ったプリシラは、それまで想像もしなかった自分の能力を発見し、他の学生たちに認められ、学寮内に自分の居場所を確保していく。

Priscilla was now a happy girl. She had found her niche in the college; her work was delightful. Under Maggie’s advice she became a member of the Debating Society, and rather reluctantly allowed her name to be entered in the Dramatic Club. She felt very shy about this, but that was because she did not know her own power. To her astonishment, Priscilla found that she could act. (136)

ここで注目したいのは、大学が職業に直結する知識や技能を身につけるためだけの場として描かれていないことだ。学問と同じくらい重視されているのは、さまざまな活動や人間関係を経験する

ことで、新たな自己発見をし、多方面で能力を発揮する訓練を積み、自信を持って他者と関わっていくことである。

こうして大学生活に馴染み、幸福な日々を送り始めたプリシラに、試練が訪れる。一部の嫉妬深い女子学生たちが、プリシラからマギーを引き離そうと、卑劣な策略をめぐらすのである。誤解され、悲嘆にくれるプリシラは、自らの悲しみのある絵画に重ね合わせる。それは、以前、学寮長が解説してくれた G. F. ワッツ (G.F. Watts) の《希望》(Hope) という作品である (図5)。そのときは絵画の意味を十分には理解できなかったプリシラは、今新たな目で絵画を見直し、絶望という負の感情ではあるものの、絵画から圧倒的な感情を喚起され、無意識のうちに独力でその絵画に解釈を加える。

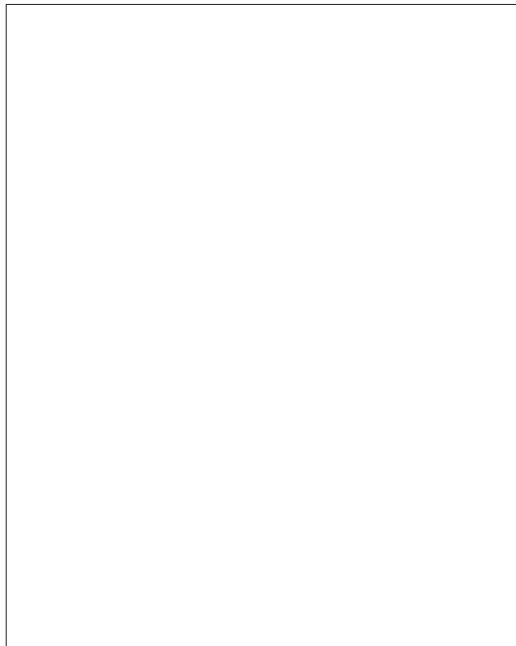


図5 G.F. ワッツ《希望》テイト所蔵

The last time she had visited Miss Heath in that room, Prissie had been taken by the kind Vice-Principal to look at the picture, and some of its symbolism was explained to her. “That globe on which the figure of Hope sits,” Miss Heath had said, “is meant to represent the world. Hope is blindfolded in order more effectually to shut out the sights which might distract her. See the harp in her hand, observe her rapt attitude – she is listening to melody – she hears, she rejoices, and yet the harp out of which she makes music only possesses one string – all the rest are broken.” Miss Heath said nothing further, and Prissie scarcely took in the full meaning of the picture that evening. Now she looked again, and a passionate agony swept over her. “Hope has one string still left to her harp with which she can play music,” murmured the young girl; “but oh! There are times when all the strings of the harp are broken; then, Hope dies.” (220-21)

学寮長とマギーの軽妙な会話に困惑した入学当初のプリシラと、知らず知らずのうちに絵画を読み解くようになった今のプリシラを比較すると、大学教育が彼女に及ぼした影響の大きさは明らかである。彼女は、自分が抱いた感情と共通するものを象徴的な絵画に見出し、さらに、自分の感情はそこに表現されているものよりも深いと考える。このプリシラの絵画との対話の場面には、教養教育の意義が具体的に描かれている。

おわりに ——ミードと『アタランタ』

ここまで読み解いてきたように、最初的女子大生小説『スウィート・ガール・グラデュエイト』には、大学における教養教育の意義がさまざまなかたちで描かれている。プリシラのように職業に就いて自立するためであれ、マギーのように学問自体が目的であれ、大学教育は、女子学生の視野を広げ、知性を発達させ、自分で物事を考えて決断する力を養う。結末で、プリシラはマギーからの支援を断り、古典の勉強を続けることを一時的に諦めて教師となる道を選択する。マギーは過去を乗り越え、ジェフリーと結婚する。著者ミードは、いくぶんプリシラに肩入れしつつも、2人の決断をとるに肯定的に描いている。

大学は、女子学生に世界の広さを、「家」に閉じこもってはい知ることのできない世界があることを教える。プリシラは、伯母の家と大学を比べて、“Everything is new to me – everything fresh and broad. There are some trials, of course, and some unpleasantness; but oh, the difference between here and there! Here it is so narrow; there, one cannot help getting enlightenment, daily and hourly.” (192) と言う。この言葉には、著者ミードをはじめ、「家」を出て社会に進出し始めた当時の女性たちの率直な思いが代弁されているように思われる。ミードは、自らが編集した少女雑誌『アタランタ』において、幅広い情報を提供し、エッセイ・コンテストや通信添削など多彩な企画を立ち上げた。それは、あたかも自分が編集する雑誌をオルタナティブな教養教育メディアにしようと試みているかのようである。その可能性については、稿を改めて検討したい。

註

- 1 ミードは、ロンドン警視庁の検察医エドガー・ボーモン (Edgar Beaumont) と医師ロバート・ユースタス・バートン (Robert Eustace Barton) から医学や科学に関する情報を提供してもらい、医学ミステリーの創始者として活躍した (Mitchell 11)。
- 2 ミードがガートン・カレッジとニューナム・カレッジで行ったインタビューに基づく記事は、それぞれ “Girton College,” *Atalanta* 7 (1893-94), pp. 325-31 と “Newnham College,” *Atalanta* 7 (1893-94), pp. 525-29 参照。
- 3 ミードの『スウィート・ガール・グラデュエイト』においても、女子学生たちがテニスの『プリンセス』を演じる場面がある。

図版一覧

- 図 1 “Seasonable Clothing, and How It should Be Made,” *The Girl's Own Paper 1881-12*, p. 683.
- 図 2 Terri Doughty ed., *Selections from The Girl's Own Paper, 1880-1907*, Broadview Press, 2004, p. 89.
- 図 3 小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ——図像資料で読む 19 世紀世界 第 5 巻』柏書房, 1995, p. 413.
- 図 4 Ibid., p. 414.
- 図 5 George Frederic Watts and assistants, *Hope*, 1886, Tate 所蔵。

引用文献

- A Lady Dressmaker. “Seasonable Clothing, and How It should Be Made” *The Girl's Own Paper 1881-12*, pp. 680-83.
- A Lady Graduate. “Presentation Day at London University” *Selections from The Girl's Own Paper, 1880-1907*, edited by Terri Doughty, Broadview P, 2004, pp. 88-9.
- Bogen, Anna. Introduction. *Women's University Narratives, 1890-1945*, vol.2, edited by Anna Bogen, Pickering & Chatto, 2015, pp. vii-xvi.
- . *Women's University Fiction, 1880-1945*. Pickering & Chatto, 2014.
- Doughty, Terri, ed. *Selections from The Girl's Own Paper, 1880-1907*. Broadview P, 2004.
- Meade, L.T. “How I Began,” Appendix A: Contemporary Interviews and Reviews. *The Sorceress of the Strand and Other Stories*, edited by Janis Dawson, Broadview P, 2016, pp. 251-53.
- . *A Sweet Girl Graduate*. British Library, 2010.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girl's Culture in England, 1880-1915*. Columbia UP, 1995.
- Owen, J. A. “Girton College” *Selections from The Girl's Own Paper, 1880-1907*, edited by Terri Doughty, Broadview P, 2004, pp. 78-9.
- Tennyson, Alfred. *The Princess. The Major Works*, edited by Adam Roberts, Oxford UP, 2009, pp. 117-202.

Tooley, Sarah. “Some Woman Novelists,” Appendix A: Contemporary Interviews and Reviews. *The Sorceress of the Strand and Other Stories*, edited by Janis Dawson, Broadview P, 2016, pp. 253-56.

*本論文は、JSPS 科研費 JP19K00426（基盤研究 C 2019-2021 年度 「イギリスの女子大生小説と少女雑誌——教育とキャリア形成に関する学際的研究」）の助成を受けたものである。